

平成19年度 三重県教育改革推進会議

第4回 特別支援教育部会【議事録兼概要】

I 日時 平成20年1月25日（金） 13:30～16:00

II 場所 三重県総合教育センター 第4講義室

III 出席者 【委員】井上 邦子、小笠原 まき子、加藤 正彦、川岡 加寿子、平野 雅也、
藤井 明宣、脇田 愉司
【事務局】鎌田 敏明、東地 隆司、坪田 知広、増田 元彦、梶原 久代、
丹羽 毅、大原 喜教、小林 哲也、北原 まり子、安田 政与志
以上17名敬称略

IV 内容

1 報告

(1)第3回特別支援教育部会における意見抜粋…資料1に基づき、梶原室長から報告

《以下質疑応答》

【委員】

聾学校では教育の中で口話以外に手話も使う指導方針と聞いた。専門性と書いてあるが、聾学校では手話ができる教員がどのくらいの率でいるのか。

【事務局】

人数は把握していないが、聾学校では通常の授業で手話を中心にやっているのでもちとちと会話する範囲はできる状況にある。専門的にとなると、数は限られてくると思う。

【委員】

聾学校でも手話のできない先生がかなりいると聞いている。専門性とかセンター的役割という中でどうなのか。日本手話と日本語手話の選択とか、口話中心にやるとか、今揉めているところだと思う。手話を使つての教育が可能という教育方針か。

【事務局】

今手話を中心にやっている。

【委員】

それは日本手話でも日本語手話でも、どちらでもいいということか。

【事務局】

把握していないので、次回調べて報告する。

【委員】

盲・聾学校は県内に一ヶ所しかないのでも、遠くて保護者の送迎が大変だと聞いたが、その辺はどうか。

【事務局】

盲学校は寄宿舎があるので、通学困難な者は寄宿舎に入っている。他は自主通学で、近辺の小さな子どもは保護者が送ってきている。遠方の者は久居まで電車に来て、久居駅から出しているスクールバスに乗っている。小学部の小さい子どもは、自主通学ができるまで保護者が久居まで送ってきている場合がある。聾学校は自立を目指すことからバスを出していない。津駅から通常の路線バスを利用している。

【部会長】

実際には90分以上乗っている子どもはいないということか。

【事務局】

盲学校・聾学校に関してはいない。

(2)第2回三重県教育改革推進会議への報告について…資料2に基づき、加藤部会長から報告

《以下質疑応答》

【委員】

特別支援学校の巡回相談機能について、どの程度の相談者、需要があるのか、数を教えて欲しい。

【事務局】

4月から8月末ぐらいまでで、合計1000回ほどの要請があった。

【部会長】

巡回システムはどの地域が中心になってやっているのか。各特別支援学校に巡回するチームが置かれているのか。

【事務局】

各特別支援学校により名前はそれぞれであるが、中心になって動くチームを組んでいる。コーディネーターが中心ではあるが、学校全体で考えて人を派遣したりして対応している。

【部会長】

西日野では児童生徒がたくさんいる中で、巡回相談に対応できるようなコーディネーターもたくさん配置されているのか。

【事務局】

コーディネーターが中心とはなっているが、複数いるので担当を分けて回ったり、管理職が行ったり、全員で対応する形で何とかやっている。

【委員】

コーディネーターは専門職として、何かの資格を持っている人がやっているのか。市民活動ボランティアの登用や委託は考えているのか。また現在そういうことはしているのか。

【事務局】

コーディネーターは教員でやっている。特に資格は関係なく、学校運営の中でやっている。小中学校の先生で700名のコーディネーターを養成したが、各学校で勉強してもらい誰でもできる状況を作ること为目标にしている。市町によっては、ボランティアを募って支援員や介助員として助けていただいている場合もある。NPOの臨床心理士の方は、巡回相談員として来てもらっている。

【部会長】

巡回するときは地域を回るのか、相談としてコーディネーターが行くのか。臨床心理士はコーディネーターと一緒に行くのか。チームの構成はどうなっているのか。

【事務局】

各市町で巡回相談員を確保しており、学校から要請等があれば学校を巡回し、子どもの様子を見てもらう。その連絡等にコーディネーターが関わっている。特にコーディネーターが臨床心理士の資格を持っているわけではない。

【部会長】

最初の構想では巡回チームとなっていたが、コーディネーター以外専門家ではない。相談機能としては臨床心理士や医療関係者、コーディネーター、精神科医がいるチームが一番良いが、現状では少し心配である。

【事務局】

連携の必要性から各地域で連携協議会を作り、医療・教育・福祉の専門家の方々に来てもらい話し合っている。

【委員】

コーディネーターについては、今後この部会でもう少し考えなくてはいけないと思う。システムとしてなぜ十分に機能できないのか、原因や理由に立ち返って考えてみる必要があると思う。研修や条件整備、現場での創意工夫や努力などにある課題・原因を解決していかないと、これ以上の充実は望めないのではないかと思う。

【部会長】

教育現場でも計画立案する人にとっても、目指す機能が十分把握できていないと思う。コーディネーターとして機能しやすい形について意見があれば、伺いたい。

【委員】

現在は専任ではなく子どもたちに日々関わりながらなので、専属専任であれば十分な機能が果たせるのではないかと思う。

【部会長】

将来的にコーディネーターの位置づけはどうなるのか。

【事務局】

各小中学校における特別支援教育コーディネーターも専任ではない。負担軽減のための努力はしているが、体制が整っていないというのが大きな課題である。それを支援する特別支援学校ぐらいは専任のコーディネーターを置くべきだ、と思いつけているがそうっていない。地域支援部として体制はあるが自分の学校のことが主になり、空いた時間に予約を入れて回るという形になっている。専従制は目指していかなければいけないと思っている。専門性は誰に聞けばいいか、誰を頼ればいいかを研修して、ホットラインを設けて市の方々と一緒に現場に行くという体制を作る必要がある。人の充実と、チームによる専門的な支援を目指していけないといけない。

【部会長】

動けるシステムにするため、専従・専門を確立して欲しい。また学校長の意識が高まらないと動きにくくなってしまいますので、教育委員会として配慮して欲しい。

【委員】

コーディネーターに関しても、きちんとした成果と検証の評価をやらないと運営していけない。学校のトップが変わりノウハウの継承がないと上手く実現できないという声をよく聞く。どういった形で専任体制が取れるのか、聞かせて欲しい。

また、なぜ西日野にじ学園で高等部の生徒が増えたのか分析すると、療育手帳の中軽度の人がかかなり増えている。通級から進学する生徒も増えている。現実的な対応もやむを得ないが、合わせて通級や特別支援学級の充実、高校に行くという選択肢も考えて欲しい。

【委員】

推進会議委員からこの部会についての意見を紹介したい。「小中学校における特別支援学級や高校についての課題等についても、議論して欲しい。」「特別支援教育については、教員の専門性がないと充実した教育になっていかないので、専門性を育てるための具体的な施策を展開していくような話し合いをして欲しい。」という意見があった。

【事務局】

今後また検討を重ねたい。

【副教育長】

各地域の課題を審議していただいた後、この部会でその辺のところを協議して欲しいと考えている。

【部会長】

審議し足りない部分もあるので、機会があれば是非審議していきたい。

2 審議事項

(1) 松阪多気、南勢志摩、伊賀、東紀州地域の特別支援学校の在り方について

…資料3、4、5、6、7に基づき、梶原室長から報告

《以下意見交換》

【部会長】

まず松阪多気、南勢志摩に関して、意見があればお願いしたい。玉城わかばの現状はどうなっているのか。

【事務局】

人数的には非常に増えているが、昨年別棟を増築したので、今のところ対応できている。今後も少し増える見込みはあるが、教室の活用等工夫することでやっていけると考えている。

【部会長】

南勢志摩から通学している子どもがいるのか。

【事務局】

大王の方からも出発しているので、かなり距離もある。時間を短くするのは実際難しく、ある程度やむを得ないと考えているが、少しでも短くなるよう経路等も考えたい。飯高からは松阪の方に出て学校に来るので、途中渋滞もあり時間がかかっている。

【部会長】

志摩コースでは通学が100分となっているが、どれだけ早く走っても時間がかかるのか。

【事務局】

極力経路の方は考えている。今後検討の余地はあると思うので、少しでも短くなる方向で検討していきたい。

【部会長】

35名乗っているというのは、意外と多い。高等部の状況はどうなっているか。

【事務局】

高等部もやはり増えている。中学部からそのまま来る者も多いし、中学校の特別支援学級から来る者も増えている。

【委員】

玉城わかばについても、平成20年度の見込みがかなり増えると聞いている。急増に対する対策を考えて欲しい。

【部会長】

現場での意見としては、どういう方向が望ましいと考えているのか。

【委員】

特別支援学校のない松阪多気地域への設置や、独立した高等部の設置はどうだろうかと話しているが、具体的にはまだである。

【委員】

重複障がいの子どもの、玉城わかばと度会に振り分けるとかについてはどうなっているのか。

【事務局】

重複障がいの子どもの数が増えているが、主となる障がいは何であるかによって、どこの学校での教育が適切であるか判断している。

【部会長】

重複が多いが、2つを統合していくにあたって不都合は何かあるのか。

【事務局】

玉城わかばは満杯で度会は余裕があるが、今の状況では統合は難しいと思う。今後の課題である。

【部会長】

志摩や南志摩、伊勢の保護者や住民から「分校を作って欲しい」というような強い希望は特になのか。

【事務局】

北勢地域のような形では聞いていない。

【委員】

度会には重度身体障がい、リクライニングの電動車いすの子どもがたくさんいるが、電動車いすそのままリフトで上がれるスクールバスは少なかったと思う。介助員の方が抱えて座席に座らせるという、相当大変な状況と聞いたが、最近はどうか。

【事務局】

肢体不自由の場合は、そのまま上がれるような形でスクールバスを充実させている。形は大きくても、人数としてはたくさん乗れない。介助員は必ず付いている。

【委員】

特別支援学校では夏休みの登校やクラブ活動がないが、サマースクールとか、学校現場を使っての開かれた形を保護者は望んでいる。そういうことは検討しているか。

【事務局】

特別支援教育ということが言われて数年経つが、センター的機能ということも含め、学習会や公開講座など保護者向けの講座を開いたり、学校によって違うが工夫しながら学校開放をしている。

【委員】

学校は管理性が強いと保護者から聞くが、基本的には開かれた形でやって良いのか。

【事務局】

学校の行事としてやっているのも、問題はない。

【部会長】

センター的機能は2つの学校で機能分担しているのか。

【事務局】

障がい別に相談体制を作っている。距離的に非常に近いので、学校の案内を一緒に作って学校に配布するなど、うまく機能している。

【部会長】

それぞれコーディネーターは何人ずついるのか。

【事務局】

一人は必ずいるが、人数は今手元に資料がなく分からない。

【部会長】

コーディネーター間の交流はあるのか。

【事務局】

コーディネーター間の連絡調整はしている。

【部会長】

次は伊賀地域について、意見をいただきたい。現状はどうなっているのか。

【事務局】

肢体と知的が対象となっているが、大部分が知的の子どもになっている。当初予想した人数より多くなっているが、校舎は少し余裕がある。

【部会長】

次に東紀州地域について、ご意見をお願いしたい。

【副教育長】

くろしお学園本校・分校ともに、昔の度会養護学校の分校としてできた。その時には高等部はなかった。知的障がいの子も肢体の子も受け入れなければならないし、学年ごとに学級を作ると教室が足らなくなる。重複の子どももいるので、障がいにこだわらず地元で受け入れられる学校を作っていこうという経緯がある。3人で1クラスという学級形態でやっている。

【部会長】

住民の方はあまり不自由を感じていないのか。

【事務局】

小学生と一緒に地元の学校に通っていることに関して意見はないが、施設が限られているので、その面での充実に関しては意見を聞いている。

【部会長】

施設が限られるとはどういうことか。

【事務局】

本体である学校に遠慮しないといけないことがある。地域や保護者から「子どもの安全を考えるとうまくいかないのではないか」という声がある。小中学校があってその中に特別支援学校の機能があって、特別支援学級があつてと、外見としては理想的な形で全てが共生している形に見えるが、なかなかそう行かない。

【委員】

重度身体障がいの子どもが学校の夏休みとか、ショートステイに津や鈴鹿まで行かないといけない状況にある。構造上の問題である。

【部会長】

本校の高等部に関しては、施設的に問題はないのか。

【事務局】

小学校の教室を借りしているので、限られた狭い面積の中でいろいろ工夫して無理をしていることもある。

【部会長】

本校と分校と分かされると、交通の利便性はあるが学校の持つ機能も分化される。出口の面で卒業後どうなるかなど、その子の一生に関わるような問題が設計される場であるのか。特別支援学校としての機能が保たれるのか。トータルで支援していくためには、学校のセンター的機能がないと、高等部の機能が不安になる。

【委員】

そういう意味で、津近辺に保護者も含め移住する方がかなり増えてきた。

【委員】

教育と福祉と、複合施設のようなものは考えられないか。老人介護や障がい者介護と、特別支援学校が一緒になった施設のように、教育と福祉が共同でやっていけば先々の見通しを持った支援にもつながっていくのではないかと思う。

【委員】

鈴鹿病院と杉の子、三重病院と緑ヶ丘というような視点だと思う。ただ福祉の流れは重度の方も含め、条件整備をしながら地域で支援していくことを目標としている。特別支援教育とは、随分方向が違うのではないか。

【部会長】

連携するとしたら、どういうところと連携するのが一番良いのか。

【委員】

入所施設も病院も一定の規模が必要だと思う。そういう安心感がある中で、デイサービスや医療的なケアなど、ネットワークを構築する地道な努力が必要である。

【副教育長】

以前施設の中に置いてきた分校を、拠点化して学校を建ててきた。その方向を戻すとすると、今まで整備してきたことが逆になってしまう。どこまでが教育でどこからが福祉か割り切っていないと、専門性を高めるための研修を教員にさせられない。教員にも時間が必要である。特別支援教育をどこまでやらなくてはいけないか、議論していただきたい。

【部会長】

人口が減りつつある地域では、人数が少なくても質の論理で投資できるかが問題である。

【事務局】

人数が少ない分声が小さいので優先順位が後になりがちであるが、一人ひとりの思いは同じなので、しっかり受け止めなければいけない。財政的なことから中・長期的な計画にならざるを得ないこともあるが、津に転居しなくても良いような体制を整えていきたい。資源が少ない地域では力を合わせないと、なるものもなくなってしまう。

(2)今後のスケジュールについて

《以下意見交換》

【部会長】

今回はこれまでの議論をとりまとめたものを用意し、それに意見をいただくことになるが、これまで討議してきた中で言い足りなかった部分があれば、意見をいただきたい。境界領域の子どもも含め、特別支援教育をどうしていくべきか、意見をいただきたい。

【事務局】

三重県の特別支援学級数は小学校で542、中学校で204である。人数は小学校で1475名、中学校で522名である。この数は特別支援学校の児童生徒数より多い。学級数も年々増加しており、知的障がいの学級が多い。知的の子どもが1042人、情緒障がいの子どもの数を加えると、大部分が知的と情緒障がいの子となる。

【部会長】

特別支援学級の中で支援していく体制として、課題をこれからどう分析していくのか。

【事務局】

発達障がいの子どもの通常学級で学ぶことになっているが、通級の対象になっているので、予算立てして教室を作っている。全国の調査では6%程通常学級にいらると言われている。特別支援教育では、その辺の子どもをどのように教育の場面で充実させていくかが、最も大きな課題と思っている。

【部会長】

現場としての不安はあるか。

【委員】

特別支援教育のあり方の一番中心を担う考え方は、共に育つということである。そこで一番大事になるのは、教師のあり様である。子どもたち一人ひとりの必要性に応じてあられるよう、数的にも質的にも充実した教員が欲しい。教員の努力も必要であるが、どうあがいても解決できない数的な不足はある。その子と時間をとって向き合うことで分かる、そこから初めて教育に入っていけるということもある。そういう面で時間と十分な数が欲しい。この会議で今悩んでいる子どもたちへの課題が、一步でも克服できたらと思う。

【部会長】

発達障がいの子どもの障がいが重なっていて、本気で取り組んだら本当に難しく、奥が深く大変である。知識だけで対処できるものではなく、肌で感じるくらいの時間とゆとりが必要である。対処した先生がプライドを持てるようなサポート体制も必要である。

【委員】

現在の教員は子どもの教育にだけあたっていれば良いという状況にない。事務量の多さが負担になっている。整理をしていかないと、余裕がなくなっていく。学校規模の大小に関わらず文書量は同じであり、その辺のことも影響があると思う。

【副教育長】

教育委員会事務局の各室が出している文書は、似たものをできるだけまとめている。各地域にあった教育事務所も廃止して、文書量を減らしてきた。しかし県立学校で整理したところ、1ヶ月に50から60、1年間で600を越える文書を教育委員会が出している。小中学校の場合は市町独自の文書も加わることになる。精査をする方向で進めているが、まだ多いと感じている。国も教員からそういう負担をできるだけ減らす措置がないか、考えている。

【事務局】

調査は一つ減らすと一つ増える。世の中全体が学校を見守る体制でないと、なかなか減らない。国にも言いたいし、世の中に対して必要性を問いたい。中学校の忙しい原因の一つに部活動があるが、その負担を教職員から外す方向で努力しないといけない。現有体制でいくなら、なるべく子どもたちという時間を教職員に作るよう、そういうことをしなくてはいけない。

【委員】

福祉サイドでも自閉症・発達障がい支援センターとしてあすなろを核にして連携しているが、そこが専門的に高度なものを持っているわけではない。センターのコーディネーターが現地へ行くことで、先生と本人がきちんと話し合いをし、地域に根ざした暮らしの中で安心感を与えるというようなことを、地道にやっていくしかない。ケアとは「相手のためにどれだけ時間を割けるか」であり、受け止める側の問題だと思う。まず、教員が向き合うことを大事にしていくことが本来だと思う。

世界的な大きな流れの中で、相当の国でインクルーシブ教育になっているが、日本では未だに共生教育と分離教育の議論がきちとなされていない現状にある。教育の機会均等という点からも考えるべきである。

【委員】

理念の部分に立ち返ると、共生教育を目指すと言いながらも逆の方向に進んでいるのではないかという懸念がある。法改正をするのであれば、必要な条件整備をしてからでないと現場は困る。どの部分で充実できるのか、県として会議で検討してもらいたい。子どもたちが充実した教育を受けられるよう、何をのせたら解決していけるのかを中長期の計画の中に入れ込んで、少しでも解決を図って欲しい。

【事務局】

今後の課題として検討したい。

【部会長】

このような会議は今後残していくのか。

【副教育長】

教育改革推進会議は続くが、部会はある期間を切って審議を終了する。特別支援学校・特別支援学級や普通学級にいる子どもの特別支援教育をどうしていくかというところまで踏み込んでいただくと、もう少し審議をお願いしたい。委員のみなさんも審議内容に要望があれば、ご意見をいただきたい。

【委員】

企業としても人育てほど難しいものはなく、これができてないと企業も成長しないし存続しない。教育の現場でも、教員の育成・研修に最大限力を注いで欲しい。子どもに対する思いを実現できる環境づくりをして欲しい。国を救うのも、教育が全てだと思う。

【委員】

情緒や知的な障がいのある子を、幼稚園の教員はみんなの遊びの中に入れようとするが、その前にどうすれば安定して学校生活を送ることができるかを考えていくことが大事だと思う。自己肯定感や自尊感情を持たせ、その中でできることを増やしていく教育が大事だと分かった。時間的にも束縛されない就学前教育の中でならそれができるが、そのためには教員の資質や専門性を高めることが大事だと思う。

【事務局】

長期的には共生教育を理想として、分離教育を目指しているわけではない。子どもたちのためにより柔軟かつ弾力的な形で、自立と社会参加と障がいの克服のために教育の世界もやっている。保護者の思いで選択できる今のやり方は、保護者を中心に考えると良いやり方ではないかと思っている。どちらか一方にするという考えは特別支援教育の考え方にはなじまないと思う。

【部会長】

特別支援学級や境界領域の子どもは、扱い方を誤ると社会性障がいに悩まされる。教育は重要である。共生という考え方はあった方が良い。

【委員】

個別の指導計画を作成するための校内システムが、うまく機能していない。その子の支援にあたるような十分な計画が立てられているのかどうか分からず、市の教育委員会に指導計画を見てもらった。どう指導計画を立て進めていくのか、進学や転校で学校が変わる時どう繋いでいくのかなど、現場は悩んでいる。

【事務局】

個別の支援計画は年度当初に手引き書を作成し、各地域で説明会も開催した。実際の場面で必要となったら、各地域の特別支援学校に地域コーディネーターを配置し助言をしているので、活用して欲しい。

【部会長】

地域での支援コーディネーターは、どういう地域で機能しているのか。

【事務局】

特別支援学校の教員としているので、校区が主体になっている。授業も少し持っている

が、要請があれば行けるようになっている。

【部会長】

そろそろ時間になるので、本日はここまでとしたい。

【事務局】

2点報告をしたい。この部会で「北勢地域の状況を打破するため、分校の設置が必要ではないか」という意見をいただき、事務局でも検討し、杉の子特別支援学校の分校として、近くて施設活用が可能な所を現在検討している。今年度洞爺湖で環境サミットが開かれるが、そのロゴマークに北勢きさら学園の生徒の作品が最優秀賞に選ばれた。

次回はこれまでの議論をまとめたものを示したいが、事前に送付するので中身を見ておいて欲しい。修正すべき点や議論の足りない部分を検討していただくことになる。

次回は2月15日（金）1時30分からプラザ洞津で開催したい。

(3) その他

なし

以 上